

初夏の思ひ出

中野勝清

立ち上がる入道雲

背中を伝う汗の滴

鼻腔を抜ける熱気

蝉たちのざわめき

生かされている

いのちの連帯感

そしてよろこび

思いがけない贈り物が

彷徨の日々へいざなう

最期までコトバを残し続けた母

かなしみと怒りに囚われ

彼女のおもいに届かなかった私

口に広がる甘酸っぱさが

三年の時を超えて蘇る

彼女から託された梅シロップに

籠められた無数のコトバ